

## 2019年度ドイツ経営経済学会第81回大会参加報告

学習院大学 小山 明宏

今年もドイツの経営経済学会が6月12日（水）～14日（金）、第81回年次大会として、旧東ドイツのロシュトック大学で開催され、日本からの参加者は、筆者一人であった。筆者は昨年以來、今年も日本経営学会からのオフィシャルな代表として参加し、歓待された。

この年次大会は別名 Pfingsttagung と呼ばれていて、Pfingsten（聖霊降臨祭）の休みに行われるものであったのだが、実はこれは今年が最後となった。すなわち今大会の会員総会でペーター・ヴァルゲンバッハ新会長の提案で、時期の変更が決まったのである。来年の大会は3月18～20日にフランクフルト（マイン）大学で行われる。筆者は会長と直接話してその詳しい理由を伝えられたが、Pfingstenの時期に大学も休みになるかは州によって異なり（ドイツの公立大学は州立）、休みにならない大学では部屋の確保、運営スタッフの活動などに大変な苦労があることは以前から衆知のことであった。これに遂に一石が投じられ、来年から開催時期が変更になったのであった。これはナチス時代に活動を停止していた以外の長い歴史を持つ当学会にとって、まさに歴史的な意思決定となる。

今大会のテーマは Dienstleistung im Wandel --- Implikation für die betriebswirtschaftliche Forschung ---（サービス概念の変貌 - ビジネスリサーチへの影響）である。「Industrie 4.0」はドイツ語で第4次産業革命の意味だが、技術の発展、特にデジタル化は、社会の変化に加えて、サービス産業にとってますます必要なことを増加させている。ビッグデータ、インターネットを通じる「モノ」、パーソナライゼーション、またはネットワークでの協力などのキーワードがこの新しい世界の特徴となっている。長い間有望視されてきたビジネスモデルは、もはや変更を余儀なくされ、多くのビジネスプロセスを再設計する必要がある。従来成功を収めていた会社でさえ、ますます新しいサービスプロバイダーのネットワークに取って代わられているか、または種類の異なるサービスの組み合わせが新しい、いわゆるハイブリッドサービスパッケージを生み出している。

というメインイメージの下での議論だが、筆者の不勉強もあり、いまひとつ具体的な考えが湧いてこなかった。やはり抽象的で、時にはジャーナリスティックに聞こえるかもしれないこの種の議論は、どの程度アカデミックに採りあげうるものなのか、あるいは人によっては「研究」のテーマではないとする方もおられそうで、より詳しく知りたいところである。

アルフレッド・キーザー門下の新会長、ヴァルゲンバッハ教授と再びゆっくり話すことができたが、来年はフランクフルト（マイン）、再来年はデュッセルドルフ（ただし3月）と決まっている。来年のメインテーマは、Digitale Transformation' だそうで、その説明でも述べられている通り、それは企業経営のすべての側面に関連したテーマではあるが、筆者のイメージでは今年と同様に、いまひとつ具体的な考えが湧いてこない気がしている。その一因はこれらのテーマがドイツに固有のものでないこと、別にドイツ語でなくても研究できるテーマであることなのではないかと思う。ただ、それは同時にこれが世界共通の問題なことを意味しているということでもあり、我が国にも役に立つものであろう。

ロシュトックは旧東独の工業都市、特に造船で有名だったが、中世からのハンザ同盟都市で落ち着きを感じる街であった。来年のフランクフルト（マイン）、再来年のデュッセルドルフは共に日本にとりわけなじみのある街で、日本経営学会会員の先生方が多数参加されることを期待したい。

